

一

次のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 着物のウラジ

(2) エイセイ面に注意する

(3) 注文をウケタマワる

(4) ユウビンが届く

(5) カンビョウをする

二

次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

樹

吉野 弘

人もまた、一本の樹ではなからうか。
樹の自己主張が枝を張り出すように
人のそれも、^④見えない枝を四方に張り出す。

身近な者同士、^⑤許し合えぬことが多いのは
^③枝と枝とが深く交差するからだ。
それとは知らず、いらだって身をよじり
互いに傷つき折れたりもする

仕方のないことだ
枝を張らない自我なんて、ない。

^①しかも人は、生きるために歩き回る樹
互いに刃をまじえぬ筈がない。

枝の繁茂しすぎた山野の樹は
風の力を借りて梢を激しく打ち合わせ
密生した枝を払い落す——と
庭師の語るのを聞いたことがある。

人は、どうなのだろう？

^⑥剪定鋏を私自身の内部に入れ、小暗い自我を
刈りこんだ記憶は、まだ、ないけれど。

〔吉野弘詩集〕ハルキ文庫

(1)

——^④「見えない」のはなぜですか。
ア 心理的には外れたところに存在するから
イ 人には見えないようにかくしているから
ウ あつてないような弱々しいものだから
エ 自分自身では意識や自覚をしていないから

(2)

——^⑤「許し合えぬこと」とは何をいっていますか。
ア 自我と自我がぶつかり合ってしまうこと
イ お互いの欠点が見えて認め合えないこと
ウ 同じ方向でいつもきそい合ってしまうこと
エ あまえ合つて言うべきことが言えないこと

(3)

——^③「枝と枝と」とあるが、この「枝」とは何を指していますか。一・
二連の中から一語で答えなさい。

(4)

——^①「しかも人は、生きるために歩き回る樹」とはどういうことを強めて
いますか。
ア 人は一カ所に落ち着いていることができない
イ 人はさまざまな人とかわり合う機会が多い
ウ 人は過去から未来へ動き回ることができる
エ 人は枝をふり回して多くの人に傷をつける

(5)

——^⑥「剪定鋏を私自身の内部に入れ、小暗い自我を／刈りこんだ」とは
どういうことですか。
ア 他人の力によって自分自身の自我をより正していくこと
イ 自然の不思議な力を利用して自我のやみを照らすこと
ウ 出すぎた自我をそれぞれの判断で整理していくこと
エ 周りの人の自我とぶつかりあうことで角が丸くなること

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「顔を貸せ」とすこむのは、いつしよにこいということであつて、顔だけはずして貸すことではない。会合に「顔を出す」といっても身体ごと出席する。「顔に泥をぬる」といえば、そういう美顔術もあるが、ア ことをいう。「顔から火が出るよ」とB 人に、「それはたいへん」と消火剤をぶっかける人はいない。

◎顔は、その人の個性の象徴。だからこのように、その人のまるごとを、「顔」という言葉にことよせて言いあらわす。この顔を他人が無断で写真にとつたり、その写真を無断で公表したりすると、プライバシーの侵害だ、と問題になることがある。

もつとも、「顔」がプライバシーだとすると、すこし妙ではある。プライバシーというところ、その人のD なこと、知られたくないこと、という印象が強い。ところが顔は、身体他の部分のようにふだん衣類でおおつて隠しているところではない。だれにでも見せて歩く。「知られたくない」などと言つては、部屋から一步も出られない。だれにでも平気で見せているものが、たまたま写真にとられて公表されたからといって、なぜ目くらまをたてるんだらう。このなぞは、指紋のことといつしよに考えると解ける。

(中略)

指紋をおいそれと警察や役所に採られたくない、という気分はだれにもある。自分が特定され、それを採られるときは何か犯罪をおかしたとき、という現実があるからだらう。だから指紋は知られたくないもの、つまりプライバシーにふくまれる。

E、顔も指紋も身体の一部ではある。そのためか、指紋を定住外国人からも強制的に採る制度を憲法に違反しないとしたある判決は、平気で「指紋それ自体は、身体の外表の紋様にすぎず、個人が私生活の一部として秘匿したい個人の情報ではない」と言いはなつた。指紋は指先の皮膚もよう、別にはずかしいものではないから、まあいいだらう、というこの発想には、指紋をとおして個人情報報がいもづる式に入手できることへの緊張感が、それこそ指先ほどもないし、日本人と同じ生活をしているのに、外国人だというだけで指紋をむりやり採られる屈辱感が、F 皮膚感覚でわかつていない。

C プライバシーとは、顔であれ指紋であれ、たんに自分の私生活上のことというより、自分のもっている自分の情報は、それを他人に知らせるかどうかを自分で決めること、つまり自己情報の自己管理権、と考えたほうがわかりやすい。いつも見せ歩いている顔だが、それをよほどの理由もないのに勝手に撮影したり、ましてや公表するのは、やはりプライバシーを踏みにじつたことになるのである。

◎プライバシーをこういう視点で見ると、個人情報報が、本人の知らないところを出回っているらしいことも、気にしていい。情報化時代とやらで、どこで入手したのか、住所・電話番号はもとより、年齢、性別、出身校、家族構成、はては趣味や資産までキャッチしているらしいダイレクト・メールが、ひんぱんに送られてくる。子どもが高校に進学したとたん「奨学ローン」の案内が送られてきた。まるでこちらの生活をのぞき見されているようで、気味が悪い。

プライバシーを自己情報の自己管理権と考えたと、プライバシーとは逆向きの「情報公開」とのつながりもよくわかる。プライバシーとなると「教えない」と言われるが、情報公開は「教えろ」と迫るのだから、一見したところは正反対だが、D 根つこのところでは、考え方につながりがある。

情報公開とは、官庁や役所がもっている公的情報を国民に知らせること、国民が知ることだが、そうすべきなのは、官庁や役所がもっている情報報が、ほかでもない国民のものだからである。主権在民であれば、政府も地方自治体も国民・住民が主役であつて、国民・住民から託されて仕事をしているにすぎない。その仕事の過程で集まつてきた情報、集めた情報は、主役が「見せろ」と言えば「はい」とさしだすのが、原則だらう。

個人の情報を自分で管理するのがプライバシー。だとすると、国民の政府・官庁・役所であれば、その情報は、役人がではなく、国民が管理もできるのが原則のはず。それを見せろと迫られて、E を変えることはない。

(森英樹『主権者はきみだ』岩波ジュニア新書)

(1) A B に入る言葉をそれぞれ答えなさい。

ア はずかしがる イ 激しくおこる ウ 調子に乗る エ 大笑いする オ はじをかかせる

(2) C 「顔は、その人の個性の象徴」とはどういうことですか。

ア 顔や性格がたとえ似ていても同一ではない人物像
イ バランス感覚を反映した均整のとれた顔立ち
ウ その人自身のあらゆることを表した一つの形
エ 豊かな表情からうかがえる好ましい将来の姿

(3) D に入る、「私的」の意味を持つ六字のカタカナ語を答えなさい。

(4) E G に入る言葉をそれぞれ答えなさい。

ア こうしてみると イ さらに ウ そればかりか エ ところが オ また

(5) F 「皮膚感覚でわかつていない」とはどういうことですか。

ア 内面は理解しても外見上理解していない
イ 実感をともなつた上での理解をしていない
ウ 感覚的な温度差をもつて理解していない
エ 文化の差を頭に入れた理解をしていない

(6) H 「プライバシーをこういう視点で見る」を言いかえた部分を、I より後ろの本文中から二十〜二十五字で探し、はじめと終わりを五字ずつ答えなさい。

(7) I 「根つこのところでは、考え方につながりがある」とあるのは、なぜですか。

ア 自分に関わる情報はしっかりと守られなければならない、そのために官庁や役所、プライバシーが活用されているから
イ 自分に関わる情報は必ず知る権利をともなつており、たとえ政府であつてもその権利を侵害することはできないから
ウ 自分に関わる情報は自分が見せるか見せないかを決めるものであり、それを他人に決められるのはあやまりであるから
エ 自分に関わる情報は本来管理者がはっきりしているのだが、現代ではその原則が軽視され情報が一人歩きしているから

(8) J に入る「顔」を使った漢字二字の熟語を答えなさい。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

④長編小説を書くという作業は、根本的には肉体労働である。僕は認識している。文章を書くこと自体はたぶん頭脳労働だ。しかし一冊のまとまった本を書きあげるとは、むしろ肉体労働に近い。もちろん本を書くために、何か重いものを持ち上げたり、速く走ったり、高く飛んだりする必要はない。だから世間の多くの人は見かけだけを見て、作家の仕事を静かな知的書齋労働だと見なしているようだ。コーヒークップを持ち上げる程度の力があれば、小説なんて書けてしまふんだらうと。しかし実際にやってみれば、小説を書くというのがそんな穏やかな仕事ではないことが、すぐにおわかりいただけるはずだ。机の前に座って、神経をレーザービームのように一点に集中し、無の地平から想像力を立ち上げ、物語を生みだし、正しい言葉をひとつひとつ選び取り、すべての流れをあるべき位置に保ち続ける——そのような作業は、一般的に考えられているよりも遥かに大量のエネルギーを、長期にわたって必要とする。身体こそ実際に動かしはしないものの、まさに骨身を⑤ような労働が、身体の中でダイナミックに展開されているのだ。もちろんものを考えるのは頭(マインド)だ。しかし小説家は「物語」という*アウトフィットを身にまとい全身で思考するし、その作業は作家に対して、肉体能力を⑥なく行使することを——多くの場合酷使することを——求めている。

才能に恵まれた作家たちは、このような作業をほとんど無意識的に、ある場合には無自覚的におこなっていくことができる。とくに若いうちは、ある水準を超えた才能さえあれば、小説を書き続けることはさして困難な作業ではない。⑦様々な難関は易々とクリアしていける。若いというのは、全身に自然な活力が充ち満ちているということなのだ。集中力も持続力も、必要とあらば⑧向こうからやってくる。こちらから求めて求めるべきことは、ほとんど何もない。若くて才能があるということは、背中につばさがはえているのと同じなのだ。

しかしそのような*自由闊達さも多くの場合、若さが失われていくにつれて、次第にその⑨自然な勢いと鮮やかさを失っていく。かつては軽々とできたはずのことが、ある年齢を過ぎると、それほど簡単にはできないようになっていく。速球派のピッチャーの球速が、ずるずる落ちていくのと同じことだ。もちろん人間の成熟によって、自然な才能の減衰をカバーしていくことは可能だ。速球派の

ピッチャーが、ある時点から変化球を主体にした頭腦的なピッチングに切り替えていくように。しかしそれにももちろん限界というものがある。喪失感の淡い翳もそこにはまたうかがえるはずだ。

その一方で、才能にそれほど恵まれていない——というか水準ぎりぎりのところをやつていかざるを得ない——作家たちは、若いうちから自前でなんとか筋力をつけていかななくてはならない。彼らは訓練によって集中力を養い、持続力を増進させていく。そしてそれらの資質を(ある程度まで)⑩才能の「代用品」として使うことを余儀なくされる。しかしそのようにしてなんとか「しのいで」いるうちに、自らの中に隠されていた本物の才能に巡り合うこともある。スコップを使って、汗水を流しながらせせと足元に穴を掘っているうちに、ずっと奥深くに眠っていた秘密の水脈にたまたまぶちあたったわけだ。⑪まさに幸運と呼ぶべきだろう。しかしそのような「幸運」が可能になったのも、もとはといえば、深い穴を掘り進めるだけのたしかな筋力を、訓練によって身につけてきたからなのだ。晩年になって才能を開花させていった作家たちは、多かれ少なかれこのようなプロセスを経てきたものではあるまいか。

【語注】 アウトフィット＝装備

自由闊達さ＝自由にのびのびと行動すること

(村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』文春文庫)

- (1) ④「長編小説を書くという作業は、根本的には肉体労働である」とありますが、筆者がそのように認識しているのは長編小説を書くことがどのようなことであると考えているからですか。次の文の(一)に入る表現を本文中から二十二字で探し、はじめと終わりを五字ずつ答えなさい。

長編小説を書くということは、肉体労働のように(一)ことであると考えているから。

- (2) ⑤にはどれがあてはまりますか。

ア 砕く イ 護る ウ 削る エ 惜しむ

- (3) ⑥「なく」の⑦に「ま」から始まるひらがな四字を入れ、「行き渡らないところがないさま」の意味を持つ表現を完成させなさい。

- (4) ⑧「様々な難関は易々とクリアしていける」ということを比喩している表現を本文中から十二字で書きぬきなさい。

- (5) ⑨「向こうからやってくる」とはどのようなことですか。

ア 努力を続けて手に入れることができる
イ 知らないうちになんとかなってしまう
ウ その時にだけ力を発することができる
エ 他のものでなら十二分に補えてしまう

- (6) ⑩「自然な勢いと鮮やかさを失っていく」とありますが、それを人は何で補っていますか。本文中から五字で書きぬきなさい。

- (7) ⑪「才能の「代用品」とはここではどのようなものを指していますか。

ア 恵まれた状態の中で自由自在に動き続ける力
イ 無意識のうちにも満ちあふれてくる自然な力
ウ 年齢という限界を超えてもお失われない力
エ 若いころからきたえ続けたことで得られる力

- (8) 作家にとって、⑫「まさに幸運と呼ぶべき」なのはどのようなことですか。本文中から二十三字で探し、はじめと終わりを五字ずつ答えなさい。

五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

探しても探しても、どこへ雲隠れしたのか、光吉の貯金通帳は見つからない。
④ 光吉は惜しいと思うよりも心配だった。それは小学校へ入学した時、村の産業組合から十銭と記入したのをもらったもので、以来まる四か年、光吉は毎月一定の日に十銭ずつ積んで来た。それがふいに見えなくなったのだ。

「学校で失くしたんじゃないかねえのか？」

母親は、もう九割まではそうだと信じている。けれども、光吉には学校で失くしたおぼえはない。光吉はたしかに、教科書の間へ挟んで家へ持って帰ったのだ。

その時、ひらめくように光吉は思い出した。教科書、あっ！ そうだ。貯金通帳は教科書に挟んだままになっていた。その教科書を、光吉は新学年がはじまるころ、屑屋に売ってしまったのだ。母親も、それは姉譲りの古いもので、もう下に誰も使うものが居ないのだから、売ってそのゼニで帳面でも買えと言ったのを、今も明らかに覚えていた。

「それはとんだことをしたなア。」

母親は、余りにも思いがけぬことだけに口惜しがった。父親は光吉をなぐさめるように、「組合に話せば、いつでも新しいのをくれるよ。組合の貯金台帳には、ちゃんと光吉がいくら積んだか記してあるんだからなア」と言ってくれた。

けれども、光吉は、やはり晴々とはいなかった。光吉には、十銭、十銭と四年間にわたって記入された、あの手垢まみれの通帳は、単なる紙のつじ合わせではなく、何だか生きもののような気がする。それも光吉とはごく身近な、親類筋の生き物だ。いや、光吉自身、その通帳の中で息づいている……そんな感じさえもするのである。だから、かりに新しい通帳に、四年間の積金四円八十銭也と記入してもらっても、光吉としてはなんだかうれしくないように思われる。

「仕方がない。学校の先生にわけを話して、先生から組合へ頼んでいただこう。」

貯金日の二十五日の朝、光吉はそう決心して家を出た。ところが、学校に着いて、カバンを席に入れてみると「松村君、ちょっと……」と受け持ちの山田先生に呼ばれた。何のことか見当はつかなかったが、特別叱られるようなおぼえもないので、光吉はそのまま職員室について行つた。

「松村君、貯金通帳を失くしちゃしないかね。」

光吉は一瞬きよんとした。

「ほら、これは君の通帳だろう。」

「はい、僕のです。」

光吉は思わず通帳につかみかかった。

「ははは、君は、これ、どこで失くした。」

「はつきりとは、わかりません。」

「そうだろうなア。」

「けど、古い教科書だの、雑誌だのと一緒に、屑屋へやってしまったのはたしかです。」

「そうだ。そのとおりだよ。たしかにこれは屑屋さんの手に渡ったんだ。だけど、回り回って、再び持ち主の手に帰って来たんだ。これからは大切にしまえ。なお、どうしてこの通帳がかえって来たか。くわしいことは、朝会の時に校長先生から話していただくことになっているよ。」

光吉はそう聞くと、また一つ心配になった。校長先生はいったいどんな話をされるのだろうか？ 全校生徒の前で、自分の不注意をお叱りになるんじゃないだろうか？ しかし、たとえそうでも、光吉はやはり嬉しかった。光吉は、今は少しくらい叱られても、それはあたりまえのことだと思いつつ、十銭、十銭と、四十八回も並んでいる通帳を、⑤ そつと廊下の隅でひろげてみた。

さて、朝会の時間が来たが、校長先生はいつもよりむしろ上機嫌のこにこ顔で「今日はみなさんにうれしいお話を聞かせましょう」と語り出した。それによると、屑屋に渡った光吉の通帳は、問屋から東京の製紙会社に行き、その倉庫に積み込まれたが、ふとした機会から倉庫の係*人夫の眼にとまり、いたくその人夫を感激させ、結局、その人夫の手で学校あてに送り返されて来たのだった。

「それで、その人夫の手紙ですが、今、読み上げますから皆さん、静かに聞いているんですよ。」

校長先生はそう話を区切って人夫の手紙を読んだ――。

「大切な貯金通帳を失くした松村光吉君はどんなにがっかりしていることでしょうか。しかし僕にとっては、まことにありがたい通帳です。僕は今日まで人間の

いて行つた。そして青年学校を卒業する頃になって、光吉は初めて長い間の淋しい思いを言葉にまとめることが出来た。

僕の通帳はあの人夫に見つけてもらえたが、あの人夫も、誰かに見つけてもらえたらどうか？ それとも、あの人夫は、⑥ まだ屑物の倉庫の中にいるだろうか？

だが光吉は、またいつか言うかもしれない。

⑦ 高位高官になることが人間の真の幸福ではない。むしろ、紙屑と一緒に倉庫にいたことこそ人間の真の幸福だ、と。

【語注】 人夫＝力仕事に従事する労働者

(住井すゑ「美談」『住井すゑ・初期短編集Ⅰ』冬樹社)

(1) ① 「光吉は惜しいと思うよりも心配だった」とありますが、光吉にとってこの通帳はどのようなものですか。そのことが最もよくわかる一文を本文中から探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(2) ② 「そつと廊下の隅でひろげてみた」とは光吉のどのような思いのあらわれですか。

ア 全校生徒の前で叱られる不安を、通帳を見ることが落ちつかせている
イ せつかく通帳が見つかったので、二度と失くさないよう用心している
ウ 大事な貯金が減っているのではないかと思ひ、心配になっている
エ 探していた通帳が見つかった喜びを、ゆっくりかみしめている

(3) ③ 「すっかり目がさめました」とありますが、どのような状況から目がさめたのですか。

ア 小さい頃からがんばって勉強をしながらお金をためていった状況
イ めぐまれた生活に慣れきって、お金の尊さに目を向けずにいた状況
ウ 貯金もせずにぜいたくばかりしている自分はずかしく思っている状況
エ 貧しさに不満を持ちながら、わずかな銭すらも大切にしないでいる状況

(4)

①に、「わずかのものも積み重なれば高大なものとなる」という意味の、「なる」で終わることわざをひらがなで答えなさい。

(5)

⑤「これは美談です」とはどのような内容を指していますか。

ア 人夫は捨てられた通帳のお金を使ったが、思い直して光吉を上げます手紙をそえて返してくれたこと
イ 光吉が家の仕事を手伝いながら貯金が人夫の心を動かし、それによって通帳がもどってきたこと
ウ 光吉は子供でありながら家の仕事を手伝い、古い教科書売るなどして家計のためにつくしていること
エ 人夫と光吉は見知らぬ者同士であるにも関わらず、たがいを気にかけてそのやさしさが相手を救ったこと

(6)

⑥「まだ屑物の倉庫の中にいるだろうか？」にある光吉の思いはどれですか。

ア 努力していたことが認められて、つらい生活からぬけ出せたかどうか
イ 思わぬ大金が手に入って、なに不自由ない生活が送れているかどうか
ウ 人知れぬ淋しさに寄りそってくれるやさしい人に出会えたかどうか
エ 屑物倉庫での労働こそが、真の幸福であることに気づいたかどうか

(7)

⑦「高位高官になることが人間の真の幸福ではない」とありますが、これは人夫も同じように考えています。それがわかる部分を三十字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(8)

⑧「なんだかうれしくないように思われる」のはなぜですか。次の文を完成させなさい。

古い通帳は、(二十五) (三十字以内) から。

氏 名	
-----	--

受験番号					
------	--	--	--	--	--

- ・句読点や「」も一字とします。
- ・記号の付いているものはすべて記号で答えなさい。

一	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	ウ ラ ジ	エ イ セ イ	ウ ケ タ マ ワ る	ユ ウ ビ シ	カ シ ョ ウ

二	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)

三	(1)		(2)	(3)					(4)		(5)	
	Ⓐ	Ⓑ							Ⓔ	Ⓕ		
(6)											(7)	(8)
				~								

四	(1)										(2)	(3)					
						～						ま				なく	
	(4)											(5)	(6)				
	(7)	(8)															
						～											

五	(1)				(2)	(3)	(4)			
							なる			
	(5)	(6)	(7)							
(8)										
古い通帳は、										
				25				30	から。	

合計	
----	--